

青年期の現在家族が未来家族イメージに与える影響について

—未来動的家族画と面接を用いて—

児玉 夏枝

1. 問題・目的

Erikson, E.H.によって示された「アイデンティティの確立」を発達課題とする青年にとって「自立」は大きなテーマである。Erikson (1950) は青年期に優勢になる発達の危機をアイデンティティ達成 対 アイデンティティ拡散としており、この時期には父母や教師などの理想的な人物との「同一化」を脱し、自分とは何者かといった「同一性」の問題が次第に重要になってくる。齋藤 (2007) は青年期について“実際に一人暮らし（下宿や寮など）が始まって家族と物理的に分離する者も多くなりますが、家族と同居している場合でも生活のサイクルが異なってくる人が多いことから、孤独感、疎外感に耐えつつ、自己を作り上げていき、情緒的にも家族に頼りすぎることなく過ごせるよう分離していくが必要になります”と述べ、さらに“一般には第二性徴の発現を特徴とする身体的成熟から始まり、就職・結婚という社会的成熟までの期間”を指してきたことも示している。つまり、青年はまず現在の家族から物理的にも情緒的にも「自立」することが目指される。そしてその「自立」は次に外の社会へと世界を広げ、自分の生活基盤を確立しながら別の家族を作りあげるための模索していく準備段階に繋がっていくといえ、どのような「家族」を築いていくかという課題に青年は取り組まなければならない。

このような「家族」を調査するために色々な手法が用いられている。例えば五十嵐 (1989) は大学生に時間的展望テスト (TP-SCT) を用いて青年の未来の家族について調査を試みているが、“全体に家族の時間的展望としての記述は、他の「職業」や「人間関係」の記述に比較して、抽象的で漠然としたものが多かった。そして「明るい」・「暗い」・「楽しい」・「気まずい」など家族についての単純な形容が多い”ことを示した。また荒井 (2012) も家族イメージ SCT を作成し、家族イメージを捉える試みを行っているが「わたしにとって家族は」や「家族と一緒に」の項目では回答に多様性が見られなかったことが課題に挙げており、言語的情報における家族イメージの表現の限界を示唆している。こうしたことから家族イメージを調べるには投映的な方法がより適していると考えられる。投映的な方法としては、水島 (1981) が家族関係単純図式投影法として家族の枠を示す円の中に家族成名を記入したコマを配置することで家族のイメージを図式化する方法を考案し、また亀口 (2003) は家族イメージ法 (FIT) として円形シールを個々の家族成員に見立てて正方形のボードに配置させ、さらに相互の結びつきの強さを三種類の直線で表現することで、家族イメージを視覚的に把握できる手法を考案している。しかしこれらの方法は図式化され視覚的に捉えやすい利点がある一方で、対象者の意識が強く

関与するため、より深く無意識に感じている家族イメージを把握することは難しい。そこで相模ら（1996）や相模（1997）が行った動的家族画（Kinetic Family Drawing, 以下 KFD）と家族イメージ法を用いた研究が注目される。KFD とは Burns&Kaufman（1972）が確立した投映描画法であり、家族全員をただ並べて描くのではなく、家族が何かしているところを描かせるものである。描かれる人物の行為・動作は描き手の自由な表現に任されるという点で、描き手の捉えた各家族成員が示す対人態度と全体として描き手の目に映る家族力動を読みとることを可能にし、より深い投映を行うことができると考えられる。相模ら（1996）や相模（1997）では KFD を用いて現在の家族（以下「現在家族」）と未来の家族イメージ（以下「未来家族」）を比較した研究が行われており、この研究の KFD では「現在家族」は人物間の相互作用は少なく、それぞれが独立した行為を行っている一方で、「未来家族」は背景が自然やユートピア的なものであり、両親が子供を挟むなどの非常に密接した家族関係を示すこと、また「現在家族」はテレビ、テーブル、食べ物などの日常的物が、「未来家族」では木、花、太陽、犬などの屋外の自然、生き物がシンボルとして多く出現することを示した。

また河村（中園）（2002）は KFD を用いて、親からの期待における研究を行った。その研究からは、“親からの期待を肯定的に捉える時には期待に応じることがほとんどであること”やその一方で“期待を否定的に捉えると、反抗や自己調整することで対処が行われていること”が示され、さらに“親の期待を肯定的に捉えていた事例は親との距離も近く、親と似た姿勢で似た行為をしていたが、親の期待を否定的に捉えていた事例では親との距離が離れており、親の方を向かなかつたり、親が自分を見ない構図で描画したりと意識・無意識的に親との関係認知が表現されていた”と青年が親の影響を意識的にも無意識的にも強く受けていることが示唆された。

筆者は相模ら（1996）や相模（1997）が示した KFD の違いは単に現在家族と未来家族の違いだけではなく、河村（中園）（2002）が示すような親（現在家族）の影響を受け、現在家族の機能ごとに異なった表現として見られるのではないかと考えた。そこで本研究ではまず「現在家族」について青年がどのように捉えているか質問紙による調査を行い、「現在家族」の状況を把握する。そしてその結果を分類し、未来家族イメージについての KFD（以下、未来 KFD）と面接によって「未来家族」にどのような影響が出るかを調査することを目的とした。

2. 方法

調査協力者

大学生・大学院生 22 名（男性 12 名、女性 10 名、平均年齢 20.68 歳、 $SD=1.25$ ）

手続き

調査は 2011 年 10 月下旬～11 月中旬に行った。講義後や知人を通して質問紙を配布し、その場で記入、または持ち帰って記入されたものを回収した。質問紙は 400 部配布し 161 部回収した。回収率は 40.25%であった。その内、面接協力希望者 22 名全員に調査協力を依頼した。面接調査は個室にて対面方式にて行った。1 回の面接は 30～60 分程度であった。

材料

まず、家族機能を調査するため質問紙を用いた。また面接調査の際には面接の趣旨やデータ

の管理・処遇について説明し、理解してもらう目的の同意書、IC レコーダー、KFD を実施するための A4 サイズのケント紙、B の鉛筆、消しゴムを用いた。

質問紙の構成

(1) 家族機能についての質問紙

家族システム評価尺度 FACESKG (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at KwanseiGakuin) IV-16 (Version3) (以下、FACESKG, 図 1) (立木,1999) を用いて、現在の家族機能について尋ねた。FACESKG は Olson の円環モデル (図 2) に基づく家族システム評価尺度であるが、Olson らの FACES シリーズをそのまま翻訳したものではなく、日本の社会や文化に適合させるためにオリジナルに項目作成し、実証的な項目分析を経て作り上げたものである。

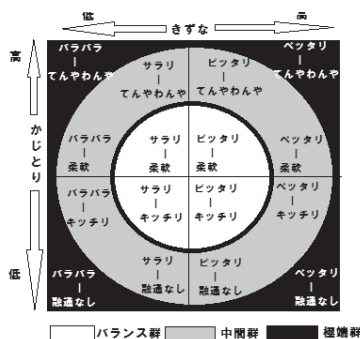


図 1 FACESKG 円環図

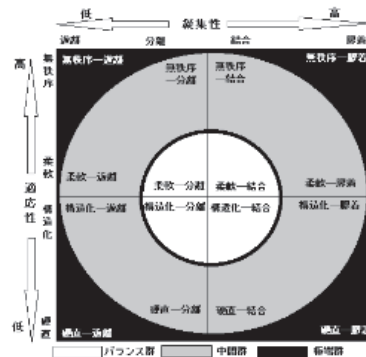


図 2 Olson の円環モデル

FACESKG では円環モデルが想定する「家族のきずな (以下「きずな」)」および「家族のかじとり (以下「かじとり」)」と家族機能度との間のカーブリーニア関係を捉えることに重点を置いて項目開発を行い、カーブリーニア関係を実証している。FACESKG ではサーストン尺度のために各項目には、「きずな」「かじとり」の各次元を最低から最高まで 8 水準に分割し、それぞれの水準に対応された尺度値が付与されている。従ってカッティングポイントは尺度値の合計として理論的に求められる (表 1)。「きずな」とは Olson の円環モデルにおける「凝集性」を意味しており、この次元は家族成員が持つ情緒的なつながりを表している。一方「かじとり」とは Olson の円環モデルにおける「適応性」を意味しており、この次元では状況的・発達の危機 (ストレス) に対して、家族システムの勢力構造や役割関係などを変化させる能力を表している。「きずな」は「バラバラ」 (-2 未満)、「サラリ」 (-2 以上 0 未満)、「ピッタリ」 (0 以上 2 未満)、「ベツタリ」 (2 以上) の 4 つの段階で示され、同様に「かじとり」は「融通なし」 (-2 未満)、「キツチリ」 (-2 以上 0 未満)、「柔軟」 (0 以上 2 未満)、「てんやわんや」 (2 以上) の 4 つの段階で示される。本来は家族との同居者を対象に行う質問紙であるが、今回は別居している場合にも同居していた頃を思い出して協力してもらうこととした。

またこの質問紙から得られた回答をもとに協力者の家族機能を健全であると考えられるものから大きく「バランス群」「中間群」「極端群」と分類した。FACESKG の円環図に基づき、「バランス群」は (サラリ・柔軟) (ピッタリ・柔軟) (サラリ・キツチリ) (ピッタリ・キツチリ)

の4つから構成した。また「中間群」は（サラリ・てんやわんや）（ピッタリ・てんやわんや）（バラバラ・柔軟）（バラバラ・キッチリ）（ベッタリ・柔軟）（ベッタリ・キッチリ）（サラリ・融通なし）（ピッタリ・融通なし）の8つから構成した。最後に極端群は（バラバラ・てんやわんや）（ベッタリ・てんやわんや）（バラバラ・融通なし）（ベッタリ・融通なし）の4つから構成した。

これらから協力者は「バランス群」6名、「中間群」12名、「極端群」4名となった。

表1 かじとり次元ときずな次元の項目の水準と尺度値

項目	水準	尺度値
かじとり次元		
1 問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	柔軟	0.5
2 家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおきないあうこともある	ぎっちり	-0.5
3 困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断を下す人がいる	融通なし	-3.5
4 わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	柔軟	1.5
5 家の決まりは皆が守るようにしている	ぎっちり	-1.5
6 わが家はみんなで約束したことでなくてもそれを実行することはほとんどない	てんやわんや	2.5
7 問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	融通なし	-2.5
8 わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	てんやわんや	3.5
きずな次元		
9 たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	サラリ	-0.5
10 わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない	サラリ	-1.5
11 悩みを家族に相談することがある	ピッタリ	1.5
12 家族はお互いの体によくふれあう	ベッタリ	3.5
13 家族の間で、用事以外の関係は全くない	バラバラ	-3.5
14 家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がでない	バラバラ	-2.5
15 休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	ピッタリ	0.5
16 誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	ベッタリ	2.5

未来 KFD の実施

通常の KFD の教示の前に「まず、あなたの将来つくりたい家族を想像して下さい」と導入を行った。その後、杉浦（2002）にならい、「あなたも含めて、その家族の人たちが何かしているところを絵に描いてください」「棒スティック状の人間、棒人間ではなく、人物全体を描くようにしてください」「絵の上手、下手は関係ありません」と教示を行った。

面接調査

半構造化面接で行った。インタビュー項目は表2に示した。

表2 インタビュー項目

1 未来家族の構成
2 何をしているところか
3 未来家族の構成の理由
4 現在家族の構成
5 未来家族のKFDと現在家族でつながるところ・異なるところ
6 (男性協力者に対して)理想の妻イメージと現在家族の母親イメージで似ているところ・異なるところ
7 (男性協力者に対して)自分がなりたい父親イメージと現在家族の父親イメージで似ているところ・異なるところ
8 (女性協力者に対して)理想の夫イメージと現在家族の父親イメージで似ているところ・異なるところ
9 (女性協力者に対して)自分がなりたい母親イメージと現在家族の母親イメージで似ているところ・異なるところ
10 その他気づいたこと

3. 結果・考察

家族機能3群による未来 KFD 描画の検討

児王：青年期の現在家族が未来家族イメージに与える影響について

まず描かれたシンボルについて杉浦（2002）を参考にシンボルの意味とそこに含まれる感情を分類して表3にまとめた。

表3 シンボルの意味について杉浦（2002）をもとに分類した表

シンボル	意味	感情的分類
1 自転車	男性的な力を意味する	ポジティブ
2 太陽	明るさや暖かさを意味する。しかし年長児に現れる場合は、未成熟な心境や退行を示す。	両価的
3 新聞	これを読む人は家族の代表者である、との認識があるが、時にはその人物に対する不安感、拒否感を示すこともある。	両価的
4 ボール	エネルギー（力）を象徴する。ボールを投げ合っている時は、両者間に親密ではあるが競争心のあることを示す。投げつけようという姿勢の時は相手に対する攻撃、怒りを持つといわれる。ボールが頭上にとどまっている時は競争の禁止、無力感を示す。	両価的
5 なわとび	当該人物の閉塞・葛藤などの状況を意味するとされる。	ネガティブ
6 ストープ	家族関係の温かさを意味する。	ポジティブ
7 テレビ	安息や娯楽を意味する。	ポジティブ
8 アイロン	母親の温かい愛情を意味する。	ポジティブ
9 雨	抑うつ傾向を示す。	ネガティブ
10 こたつ	家庭内の温かさ、友好的人間関係を意味する。	ポジティブ
11 鉛筆	勉強していることは自己防衛、合理化の機制と関連することが多い。	ネガティブ
12 自動車	心理的、物理的隔離を意味する。	ネガティブ
13 食卓・テーブル	家族の連帯感を表現する。	ポジティブ
14 食器・茶碗	家庭生活の平安を意味する。	ポジティブ
15 冷蔵庫	食事を扱う母親への依存欲求を示す。また、冷たさ、抑うつ反応を意味することがある。	両価的
16 寝具	拒否感情、抑うつ感などを意味する。	ネガティブ
17 台所・流し	食事について安定的に充たされないといった不安感のある時に描かれることが多い。流しには水に関連して抑うつ感情もこめられている。	ネガティブ
18 刃物	反社会的な問題行動を示す子どもがよく描く。包丁、ナイフ、おの、スコップ、のこぎりなどを持つ人物は脅威を与える人物で拒否・攻撃感情の対象であることを意味する。	ネガティブ
19 蝶	愛や美を意味する。	ポジティブ
20 花	美しい愛と成長過程を表現する。	ポジティブ
21 ネコ	やさしさと攻撃というアンビバレントな態度や両価的感情を表現するといわれる。ペットと一緒に描かれる人物は他の家族成員と有意な関係を持ちにくいことを示唆する場合もあるといわれる。	両価的
22 水（プール・川・池）	抑うつ感情を意味する。魚釣り、ぞうきんがけ、バケツを持つなど、水に関連したものも、それをしている人にうつろいやすい感じ（好ましくない・忌避）を持っていることを示す。	ネガティブ
23 ブランコ	包囲の形で描かれることが多く、閉塞感、不安定さが意味されるという。	ネガティブ
24 たこ・風船	拘束される家庭環境から脱出したい願望を意味する。	ネガティブ
25 はしご	上にあがっている人物に対する不安定感、不安を示す。	ネガティブ
26 バット・棒・ほうき	バット、棒、ほうきなどはこれを持つ人の腕の延長とみられる。支配統制している人、脅威を与える人、攻撃・拒否感情を感じる人であることを示す。	ネガティブ
27 火	温かさや愛情への欲求を意味する。しかし愛情が満たされない場合、強い怒りや破壊傾向を示すことがある。	両価的
28 電灯・ライト	明るさ、暖かさ、愛情を意味する。	ポジティブ
29 星	遠くて冷たいものであることから、物心両面の剝奪、痛み、悲哀感を表す。	ネガティブ

またそれに基づいて家族機能3群に出現したシンボルについてクロス表（表4）にまとめ、カイ二乗検定を行ったところ、0.1%水準で有意差が認められた（ $\chi^2=19.267$ $p<.001$ ）。残差分析を行った結果、バランス群かつポジティブのセルは期待値より有意に多かった。また中間群かつネガティブのセルは期待値より有意に少なく、中間群かつ両価的のセルは有意に多かった。そして極端群かつネガティブのセルは期待値より有意に多かった。これらの結果から、現在家族の機能のバランスが良いと未来家族イメージはポジティブなものになり、現在家族機能が不全であると未来家族イメージはネガティブなものになることが示唆された。また「きずな」あるいは「かじとり」のどちらかに極端な偏りのある中間群に属する青年の未来家族イメージは両価的なものになる傾向が明らかとなった。

表 4 家族機能 3 群とシンボルによるカイ二乗検定結果

家族機能		シンボルの種類			合計
		ポジティブ	ネガティブ	両価性	
バランス群	度数	11	1	0	12
	調整済み残差	2.2 *	-1.1	-1.7	
中間群	度数	16	2	8	26
	調整済み残差	-.6	-2.1 *	3.1 **	
極端群	度数	7	7	0	14
	調整済み残差	-1.4	3.4 **	-1.9	
合計	度数	34	10	8	52

**: $p<.01$ *: $p<.05$

これらの結果から現在家族の無意識的にも未来家族イメージに影響を与えるのではないかと考えられる。しかし描かれた未来 KFD の解釈からだけでは無意識的な側面が強く、描き手である青年が意識的にはどのように現在家族、あるいは未来家族イメージを捉えているかを見ることができない。その為、描画とともに青年の意識の側面をより表していると思われるインタビューの内容を含めてさらに解釈を進めていきたい。

未来 KFD とインタビューの考察

ここからは未来 KFD とそのインタビューをふまえながら各群における特徴を考察していきたい。なお事例における協力者の語りは、インタビュー逐語録の要約である。調査者の発言は<>、筆者による補足は（ ）で示した。なお描画は筆者による模写である。

(1) バランス群について

調査事例 1 バランス群 (U さん、男性) の未来 KFD (図 3) とインタビュー

FACESKG : バランス群 (サラリ・キッチリ) 原家族 (父, 母, 姉) と別居

<何をしている？>家でこたつに入って、家族で鍋をしているところ。上は自分で、右が父親で、左が母親で、下が姉。<その家族っていうのは今の家族？>今の家族と一緒に。将来築く家族もこういう普通の仲が良い家族が作れたらいいと思う。<U さんのお父さんのイメージと、U さんが将来なりたいと思うお父さんのイメージで似てるところと変えていきたいところ？>



図 3 バランス群 U さんの描画 (模写)

似てるところは優しいところと自由にやらせるところ。変えたいところは厳しくするとき厳しくしたいなっていうことと、父は関わりが薄い方だと思うんで、もうちょっと関わりを強くしたいなと思う。<U さんのお母さんと、もし将来家族を作るとして U さんが理想とする奥さんのイメージで似ているところと、違うところ？>母の物事をはっきり言うところは理想。変えたいところは、機嫌によって答えが変わったりするところ。<今の家族の関係と U さんが将来家族をつくる時の

関係とで同じようにしたいところと変えていきたいところ？>みんなで仲良いついていうのはこの絵みたいにしたいと思っているけど、変えたいところは子どもには自由にして、友達と遊んだりとか、家族だけじゃないところでも楽しんでほしいと思う。小さい頃は親が厳しくて色

んなことでだめと言われることが多かったんで、子どもにはちょっと自由にさせてあげたいなって思っています。

バランス群についての考察

バランス群はUさんのように家族成員がお互いを見ている構図が多く、家族全体が親密である様子が感じられた。また背景を描きこんでいることが多く、描画に入り込み、よりリアルに家族イメージを持っていることがうかがわれた。またテレビやテーブルなどの生活感のあるアイテムが描かれており、相模（1997）は「現在家族」のKFDでは日常的事物が描かれると指摘しているが、バランス群は現在家族に満足しているために理想の未来家族イメージにも現在家族の影響が強く反映されたものとなっているのではないと思われる。このことはUさんが未来KFDに「今の家族」を描くということからも示唆される。またバランス群のインタビューでは現在家族についてUさんは「父は関わりが薄い方だと思うんで、もうちょっと関わりを強くしたい」「(母は) 機嫌によって答えが変わったりする」「小さい頃は親が厳しくて色んなことでだめと言われることが多かった」など不満点を明確に示しつつも、Uさんの未来家族イメージについては、未来KFDに「今の家族」を描いたことや「将来築く家族も（現在家族のように）こういう普通の中の良い家族が作れたらいいと思う」という発言から現在家族を基盤としたものになっていることが示されている。このようにバランス群では必ずしも現在家族に全くネガティブな面がないわけではないが、そのような面もうまく抱えながら、総合的には現在家族にある程度の満足を得て暮らしており、それが未来家族イメージをポジティブなものにしていることが示唆された。

(2) 中間群について

調査事例2 中間群Mさん（女性）の未来KFD（図4）とインタビュー

FACESKG：中間群（ベッタリ・柔軟）原家族（父、母、弟、妹）と別居

<何をしている？>家族全員で公園で犬の散歩をしている。左から二番目の女の人が自分で、隣の左側の男の人が旦那さんで、娘と息子です。<理想の旦那さんのイメージとMさんのお父



図4 中間群Mさんの描画例（模写）

さんのイメージで似てるところと違ってほしいところ？>家族思いなところは似てると思う。外出にも付き合ってくれて、よく子どもと遊んでくれるところとか話題の中心になってくれるところが似てると思う。違ってほしいところは別に思いつかない。<Mさん自身がなりたいお母さん像と、Mさんの今のお母さんのイメージとで似てるところと違うところ？>割とちゃんと子どものことを気にかけて、何かあったらすぐ気付いてあげられるようにしたいところは似てる。あとすごい明るくて、はきはきしてるところと

か、子どもを楽しませられるお母さんになれたらいいと思う。ただ怒鳴りすぎなところはちょっと嫌かな。<この絵の家族と今のMさんの家族の関係とで、似てるところと違うところ？>似てるのは、実家に帰ったときなんかは、家族5人で集まって、ご飯を食べて、全員で会話し

て楽しもうとするところは似てる。違うところは弟と妹がちょっと喧嘩しがちなところくらい。

中間群についての考察

中間群では家族がお互い向き合う構図のものも見られたが、背景が描かれない、顔が描かれない、など寂しく、描画から距離を置いた印象のものが見られた。また M さんの描画のように家族が向きあわず横並びになっている構図のものも見受けられ、バランス群に比べ親密さに欠ける印象を受けた。中間群のインタビューで M さんが「(理想の夫イメージについて父と) 違ってほしいところは別に思いつかない」というように現在家族のポジティブな面はそのまま未来家族イメージに取り込まれる一方で「(母が) 怒鳴り過ぎなところは **ちょっと嫌かな**」「弟と妹が **ちょっと喧嘩しがちなところくらい**」と現在家族のネガティブな面に関してはややためらいのまざったような語り口となっており、中間群ではネガティブな面に触れることは出来るが、やや回避的な態度での向き合い方となるようである。また中間群の描画には屋外の自然や生き物など相模 (1997) のいう、ユートピア的な表現が中間群ではしばしば見られる。M さんの描画も屋外場面であり、犬、花、草むらなどが描かれている。これはユートピア的表現によって現在家族のネガティブな側面を補償し、何とかポジティブな未来家族イメージを生み出そうという試みではないだろうか。その一方で、未来 KFD 描画段階では未来家族を描いたが、インタビューの最後で＜何か気付いたこと＞を尋ねた際に「家庭を持たない形を描こうかと思った」「本当は結婚なんてことを考えていない」と未来家族を持たない形も想定していたと語った者が 12 名中 2 名おり、それとは別に未来 KFD 描画段階において家庭を持たず 1 人暮らしで過ごすという様子を描き「将来結婚する気はない」と語った者が 1 名いた。他の群にこのような語りや描画はなく、数こそ少ないが中間群の特徴と言えるのではないと思われる。この 3 名の協力者に共通するのは「きずな」次元が「ベッタリ」水準であることである。この過度に密着した現在家族の状態を未来家族イメージで補償する為には家族から離れて個人で活動するイメージを持つ他ないのかもしれない。以上のように現在家族のポジティブな面は容易に受け入れられるがネガティブな面には回避的で、未来家族イメージでは現在家族から受けたネガティブな影響を何とか補償しようという試みが見られることが中間群の特徴であると思われる。

(3) 極端群について

極端群の描画では家族の視線が合わない、あるいは家族がバラバラなことをしている、など集団としてのまとまりに欠ける印象を受けた。また杉浦 (2002) によると家族内に不安定感があり強い土台が必要である時や、家族間に意思の疎通がなく感情的にバラバラである時に描かれる、家族全員の下に線を引く「底辺線引き」や、また線で家族を区切って描く「区分化」といった描画のスタイルが見られた。また極端群 4 名のうち 3 名が「ベッタリ・融通なし」水準に当てはまるが、インタビューでは 3 名とも現在家族のネガティブな面をあけすけに語るのが印象的であった。一方で「バラバラ・てんやわんや」水準の 1 名はネガティブな面をほぼ語らなかった。極端群については「ベッタリ・融通なし」水準の B さんと「バラバラ・てんやわんや」水準の H さんという、家族機能では対照的な位置にいる 2 名の未来 KFD とインタビューについてより詳細に検討、考察することで極端群の在り方を理解したい。



図5 極端群Bさんの描画(模写)

調査事例3 Bさん(女性)の未来KFD(図5)

とインタビュー

FACESKG：極端群(ベッタリ・融通なし)原家族(父、母、妹)と同居

＜何をしている？＞2パターン考えてて、1つは子ども二人で4人暮らし(左上図)。家族みんなで自転車に乗ってるけど、もう二人しか描くのめんどくさくて描かなかった。私と子どもが前にいて後ろに子どものお姉ちゃんがいる。もう1個(右下図)は、実子も養子も含んで大き

な家にみんなで住む感じ。これ(1階の左の部屋にいる)が旦那さんと私で、(2階の右の部屋で)寝ている子どもが二人に、(2階の真ん中の部屋で)勉強する子どもに、(1階の右の部屋で)ピアノ弾いている子どもに、(2階の左の部屋に)この人らが寝るだろうベッド。子どもは4人かもっといるか。＜まず左上の家族はどんなイメージ？＞日本の人口を減らさないために(子どもが)二人は必要ということと、自分の家族も4人暮らしだということと両方。＜右下の大家族は？＞すごく上にお姉ちゃんがいったり、逆にすごく下に弟がいったりするような大家族も楽しいんじゃないかと最近考えているから。自分が働くのも諦めず、子どもをたくさん育てるっていいかもしれないと思っていて大家族もいいなと思った。＜旦那さんのイメージ？＞理想通りにはいかないと最近思うけど、体が強くて、懐の広い感じの人で、子どものことは好きであってほしい。あと、仕事のことや生きていく上での文句などを子どもの前でも普通に言える家であってほしい。＜Bさんのお父さんはどんな父親？＞基本、私の今言っていた理想とは違わないと思う。父みたいな人がいいと思ったりもするから。＜お母さんは？＞体は強くないので、家族をこんだけ増やすとかは絶対考えてない。子どもは二人までって決めて二人産んだみたいなタイプ。仕事と家庭っていう意味では私の理想とした形に近い。＜この未来家族の絵を見て、今の一緒に住んでいる家族とつながる部分があるなぁと思うところがあれば教えてください＞(現在家族は)昔はよく車で4人で出かけることがあって、こっち(左上図)は、乗り物に乗ってみんなで出かけるという意味では共通してる部分があると思う。それは自分の家庭を持ってもしたいと思う。こっち(右下図)は基本的に、夫婦二人だけでコーヒー飲んだりする。子供の人数が多いと、例えば小さい子は早く寝るし、大きい子は勉強しないといけないし、中くらいの子はピアノの練習もしないといけないとしたら、寝る時間とかもばらばらになるから、子ども達にはばらばらなことをさせた。それに夫婦だけでお酒とかコーヒーとかいう時間があってもいいなと思う。うちの場合は母が、4人で一緒に出かける、ご飯だけは毎日絶対4人で囲む、4人で掃除する、といった理想像を確実に持っている。それはわかっているけど、私はことごとくそれを破っている。でも物理的に無理な下宿生とは違い、私はやろうと思えば可能な自宅生。でも自分のしたいこと、研究であったり、部活であったり、バイトであったり、を入れて、母の理想通りにできなくしてるのは私だとは思いつつ描きました。

Bさんについての考察

面接では父に対して「理想とは違わない」と語り、4人でともに出かけることについて「自

分の家庭を持ってもしたい」と述べるなど現在家族のポジティブな面についての言及がある。しかしその一方で境界のない密着した状態を理想とする母のネガティブな面に対し、それを「ことごとく破って」抗うことを選んでいる B さんもあり、現在家族にポジティブな面とネガティブな面が共に感じられていることがわかる。そしてその 2 つの面は、1 枚の未来 KFD の中で完全に 2 つに分裂した世界として表現されている。左上図には 4 人で行動を共にするという現在家族のポジティブな面が影響したと思われる未来家族像が、そして右下図には親は親で自分たちの時間を楽しみ、子どもたちはそれぞれが意思を持って行動するといった、親と子の世代間境界がはっきりしている現在家族のネガティブな面とは真逆な理想的な未来家族像が描かれている。このように現在家族のポジティブな面とネガティブな面を明確に別々のものとして扱い、かつネガティブな面は完全に否定・拒絶するのが B さんの特徴である。B さんはネガティブなものは外に異物として放り出すことで、現在家族の影響から生じうる心の「葛藤」を回避しているのではないかと思われる。

調査事例 2 H さん（男性）の未来 KFD（図 6）とインタビュー



図 6 極端群 H さんの描画（模写）

FACESKG：極端群（バラバラ・てんやわんや）

原家族（父，母）と本人は別居

＜何をしている？＞これは家族全員で、ライブをしているところ。ベースが僕で、ピアノが奥さんで、ギターが子ども。三人にした理由は特にはないんですけど、将来奥さんや息子と一緒にライブできたらいいなって夢がちょっとある。＜男の子である理由は？＞ギターやるんだったら男の子の方が多だろうという、それだけの

理由。女の子だったら歌やピアノや何か楽器で、そ

の家族が楽しめるようなそんな環境を作りたいな、と思っている。＜H さんのお父さんのイメージと H さんがお父さんになった時のこうなりたいイメージで似ているところと違うところ？＞似てるところは、しつけとか教育とかに干渉なくて、いつも見守っている感じの父親だったので、そこはたぶん似てくると思う。違うところは、うちは両親ともに楽器はしないので、そこが違う。＜理想の奥さんのイメージと H さんのお母さんのイメージと似ているところと違うところ？＞似ているところは、子どものしつけもちゃんとして影から家族支えるみたいな立ち位置が似てる。違うところはあえて言うならば、母親は昔歌をやったことがあって、僕が理想なのは、ピアノが弾けるということ。＜この絵全体を見て、今の家族の関係とつながるところと違うところ？＞つながるところはやっぱり家族三人で、仲良く団らんというか楽しんでるところです。違うところは家族同士の結びつき方が、僕の今の家族は音楽とかじゃなくて普通にご飯食べたりとか、一緒に遊んだりとかだったけど、僕が絵に描いたのは音楽を通じて、という場面だったんで、そこが違うと思います。意外と僕の中で音楽っていうのが大きいところ占めてたんだということに気づきました。

H さんについての考察

未来 KFD では家族成員は互いを見ずにそれぞれ楽器に向き合っており、家族というよりは

演奏家の集まりのような印象を受ける。また「ライブをしている」という場面からは公の場で見せるような「非日常」における結びつきは感じられるが、その背景にある「日常」を生きる家族の姿があまり見えてこない。また H さんの面接からは、現在家族に関して強い問題は指摘されておらず、ただ「楽器をしない」点だけが理想に反するという。H さんの理想とする家族は「ピアノが弾ける」などといったスキルの面が強く求められ、スキルさえあれば代替可能なモノを求めているかのようである。このような H さんの在り方は FACESKG から見られるような現在家族の関係の希薄さが影響しているのではないかと考えられる。しかし H さんも無意識的には家族関係が希薄なままで良いとは考えておらず、「ライブ」というイベント的なテーマを中心に据えることで何とかまとまりのある家族を描こうとしたのではないだろうか。そして H さんが「音楽」にこれほどまでに惹かれるのも、誰か一人が欠けると完成しないという「音楽」の持つまとまり感を希求していることの表れではないかと思われるのである。H さんは現在家族のネガティブな面にはほぼ触れず、外的に取り入れた「音楽」によってポジティブな未来家族イメージを構成しており、そこに「葛藤」を感じられないのが特徴であると思われた。

極端群についての考察

同じ極端群の中でも B さんのように互いが密着し、自由に身動きが取れないような現在家族の機能の在り方と、H さんのように現在家族成員同士の結びつきが希薄であるがゆえの機能の在り方とでは、その在り様に違いがあるのは当然である。しかし「葛藤」をうまく処理することが出来ずネガティブなものを完全に否定しようとしたり、あるいは「葛藤」を意識的に感じなかったりといった、「葛藤」を内的に抱えるのではなく外的に処理するという点では両者は共通しているのではないかと考えられ、それは青年自身の防衛の方法なのではないかと思われた。

4. 総合考察

本研究では現在家族の機能の違いによって KFD に描かれる未来家族イメージにも違いが見られることが明らかになった。バランス群では現在家族に不満を感じつつも、そこにとらわれることなく、現在家族を基盤としてポジティブな未来家族イメージを描き出すことができていた。中間群では現在家族のポジティブな面とネガティブな面の両面の影響が未来家族イメージに現れていると考えられるが、未来家族イメージでは現在家族のネガティブな影響に対してポジティブな要素を加えるなど、できる限り補償して表現しようとする試みが見られた。また極端群では過度に密着した現在家族を持つ B さんと、過度に関係が希薄な現在家族を持つ H さんに特に注目して考察を行ったが、どちらも葛藤しない形での未来イメージの表現となっており、それはネガティブな印象を抱いている現在家族を乗り越えるための働きなのではないかと考えられた。これらのことから本研究は心理臨床実践において青年を取り巻く現在家族の機能を丁寧に把握し、青年の未来の描き方を見立てていく必要があることを示唆している。また現在家族の機能が本人にとって納得できないものであったとしても青年は自己を守るための力を持っている。その力を適切に支えることも臨床家には必要なのではないだろうか。

5. 今後の課題

本研究では一部の大学生・大学院生のみを対象として調査を行ったため、この結果を過度に

一般化することはできないため、青年期について理解を深めるためには学生だけでなく勤労青年などを対象にした調査を行い、より多くのサンプルを集めることさらに理解を深めていく必要であると思われる。また本研究では現在家族と同居している者と別居している者を区別しておらず、そのような生活状況の違いを統制することは家族を「イメージ」として捉えるにあたって重要であると考えられるため、今後区別して検討していく必要がある。さらに本研究の知見は非臨床群を対象として得られたものであり、臨床群に関しては異なる結果が得られる可能性もあるため、今後の検討を要する。

付記

本論文作成にあたり、ご指導頂きました高橋靖恵先生に深謝いたします。また本研究にご協力いただいた協力者の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

荒井真太郎（2012）文章完成法における家族イメージの表現内容の分類 佛教大学教育学部論集,23,pp.107-129.

Burns,R.C.&Kaufman,S.H （1972） *Actions, styles and Symbols in Kinetic Family Drawing(K-F-D)*. Brunner/Mazel Pub. New York(加藤孝正, 伊倉日出一, 久保義和訳, 子どもの家族画診断, 黎明書房)

Erikson,E.H. (1950) *Childhood and society*. NewYork: W.W.Norton. (仁科弥生訳 幼児期と社会1・2 みすず書房)

五十嵐敦（1989）青年期の家族展望—家族についての時間的展望—思春期・青年期問題と家族 家族心理学年報7 日本家族心理学会編集 金子書房 pp.197-216.

亀口憲治（2003）FIT（家族イメージ法）マニュアル システムパブリカ

河村（中園）照美（2002）大学生における親からの期待における研究—面接、動的家族画をめぐって— 家族心理学研究,16（2） pp.95-107

水島恵一（1981）心理測定, 診断, 治療を兼ねた図式的投映法 相談学研究, 31（1） pp.1-9.

相模健人・亀口憲治（1996）現代青年の家族イメージの研究—現在家族及び未来家族のイメージ比較— 福岡教育大学教育実践研究指導センター教育実践研究, 4, pp.57-60.

相模健人（1997）青年期における現在および未来の家族イメージに関する研究—動的家族画, 家族イメージとSD法を使って— 家族心理学研究,11（1） pp.27-41.

齋藤憲司（2007）青年期の心理的問題 下山晴彦編 よくわかる臨床心理学 ミネルヴァ書房 pp.110-113

杉浦守邦（2002）ヘルスカウンセリングの進め方3 心理テストの進め方・読み方 バウムテスト・家族画（K.F.D）・エゴグラム・好き嫌いテスト, 他 東山書房 pp109-125.

立木茂雄（1999）家族システムの理論的・実証的検証—オルソンの円環モデル妥当性の検討 川島書店

（臨床心理実践学講座 博士後期課程3回生）

（受稿2016年9月6日、改稿2016年12月2日、受理2016年12月26日）

青年期の現在家族が未来家族イメージに与える影響について

—未来動的家族画と面接を用いて—

児玉 夏枝

青年期は家族を離れて、自分の生活基盤を確立しながら別の家族を作りあげるための移行段階にあり、どのような家族を築いていくかという課題に青年は取り組まなければならない。本研究では質問紙を用いて大学生・大学院生の現在の家族機能を健全なものから順にバランス群・中間群・極端群に分類した上で、その3群の青年の未来動的家族画による未来家族イメージと面接内容について分析を行った。その結果、バランス群の未来家族イメージはポジティブな傾向があり、中間群の未来家族イメージは両価的かつネガティブな傾向があり、極端群の未来家族イメージはネガティブな傾向があった。しかし極端群の青年には葛藤を回避することでネガティブなイメージを乗り越えようとする力も見られた。これらのことから心理臨床家は青年を取り巻く現在家族の機能を丁寧に把握し、青年の未来の描き方を見立てていく必要があることを本研究は示唆している。

Effects of the Current Family in Adolescence on Future Family Image

KODAMA Natsue

Adolescents away the current family are in a transitional phase to make up another family while establishing their own livelihood, and they must confront the issue of what type of family they will build. The study population consisting of college students and graduate students was classified into the balance group, the middle group, and the extreme group according to the current family function using a questionnaire, and analyzed the future Kinetic Family Drawing and interview contents of the three groups were analyzed. Future family image of the balance group showed a positive trend, that of the middle group showed ambivalent and negative trends, and future family image of the extreme group showed a negative trend. However the youth of in the extreme group showed that they had the ability to overcome the negative image by avoiding conflict. Considering these findings, this study suggested that clinical psychologists should carefully examine the function of the current family surrounding the youth, and observe how they will draw their own future family image.

キーワード：青年期，現在家族，未来家族イメージ

Keywords: Adolescence, current family, future family image

